

## 現代朝鮮語の ‘-lo toyta’ について

深 見 兼 孝

### 1. はじめに

現代朝鮮語の格助詞 $\cdot lo$ は多様な意味用法をもっているが、各々の意味用法を関連づける作業はまだ進んでいない。一方、 $\cdot lo$ の包括的な機能を明らかにしようとする研究もあるが、提案された機能が従来言われている意味用法とどのように関連づけられるのか、明らかになっていない。動詞 *toyta*[なる]が要求する、変化の結果を表す成分は、一般的には格助詞 $\cdot ka$ で標示されるが、 $\cdot lo$ で標示されることもある。両者の違いについての議論はあるが、まだ十分とは言えない。

そこで、本稿は $\cdot lo$ の持つ多様な意味用法を関連づける作業の一環として、動詞 *toyta*[なる]が、 $\cdot lo$ で標示された変化の結果を表す成分を伴う例（以下、特に断らない限り、このような構文を単に $\cdot lo toyta$ と呼ぶ）を取り上げ、この成分と主語の表す成分との意味的な関連性を分析したい。*toyta*が変化一般を表す動詞なので、これに対して $\cdot lo$ で標示された成分が意味的にどのような規定を加えているかは、結局この成分と主語の表す成分との意味的な関連を通してしかわからないと思われるからである。

### 2. 先行研究

崔鉉培(1937)は $\cdot lo$ を *eccicalithossi* (副詞格助詞)<sup>2)</sup>の一つとして、*kotcalitho* (處格助詞)、*yencangcalitho* (器具格助詞)、*pakkwumcalitho* (変成格助詞)の3つに配置している。本稿で取り上げるのはこのうち *pakkwumcalitho* (変成格助詞)としての $\cdot lo$ に該当する。崔鉉培(1937)は「変成格助詞」の定義を簡略的に示し、これには $\cdot ka$ もあるとしているが、両者の差異については言及していない。以来、一つの流れとして $\cdot lo$ の意味用法を詳細に記述する方向で研究が進んでいる。김승곤(1992)は $\cdot lo$ の「意味機能」を大きく13個に分類、その10番目が「変化や転換」である。 $\cdot lo toyta$ の文もその例として一つ挙がっている。この例文には、同じ名詞に $\cdot ka$ が結合して *toyta*と組み合わせられている部分を含むが、両者の違いについては言及がない。また、「意味機能」の分類基準が示されておらず、若干の言及があるものの、13個の「意味機能」やその下位分類が相互にどういう関係にあるのか明らかではない。

이희자/이종희(1998)は-*lo*を副詞格助詞とし、大きく11個の「意味・機能」に分類している。その4番目に「変化、変成」をあげ、名詞+*lo*は「その名詞が変化して新しく生じた様子や状態を表すもの[で、この時の-*lo*は]他の形態に代えることができない」(p.76)としている。-*lo toyta*文はその例として一つ挙げている。しかし、やはり、11個の「意味・機能」やその下位分類が相互にどういう関係にあるのか言及がない。

一方、-*lo*の機能を包括的に捉えようという研究もある。任洪彬(1974)は-*lo*が付加された名詞には姉妹項目が存在し、-*lo*は「選択」の機能を持つとしている。また、李南淳(1998)は、*paradigmatic axis*が動詞にあって、-*lo*が付加された名詞がそこに従属し、動詞の意味に対し「外延的限定」の機能を持つとしている<sup>3)</sup>。任洪彬(1974)と李南淳(1998)は、多くの意味的類型に属す動詞との組み合わせを取り上げ、それらに共通した機能を-*lo*に見出すことで、-*lo*の機能を包括的に把握しようとしていると言える。しかし、逆に「選択」や「外延的限定」とそれまでに言われてきた-*lo*の多様性がどう関連しているのか疑問が残る。すなわち、本稿のテーマである *toyta* との結びつきについて言うなら、変化と選択、あるいは変化と外延的限定が何らかの派生関係にあるのか、あるとすればどんな関係にあるのかが直ちに明らかではないのである。

以上の研究は、一方は体系性に言及のないままできるだけ詳細な記述を行ったものであり、もう一方はいわば「一気に」包括性を志向したもので、両極端にあると言えよう。この中間にある研究として南基心(1993)をあげることができる。

南基心(1993)は文型に依存した記述を行うことで体系性を維持しており、-*lo*の個々の意味用法に関して、ある程度関連性を把握することができる。すなわち、南基心(1993)は-*lo*の用法を述語の意味によって大きく3つに分類し、それぞれをまた述語の意味によって細かく分類しているが、こうすることで、上位分類と下位分類の関連性と、-*lo*の用法が3つにまとめられることを示している。さて、*toyta*が述語となっている例は、その2番目の「属性」「変成」の下位分類の一つに属しているが、-*lo*が付加された名詞を述語として書き換えることができない、-*lo*は-*ka*に置き換えることができると述べている。この後者は上にあげた이희자/이종희(1998)と異なる。

ここで、-*lo*の意味用法は述語の意味に規定される面が強いことが分かる。逆に、述語が極めて一般的な意味を持つ場合、-*lo*の解釈は-*lo*が付加された名詞と主語の意味や状況に依存する度合いが強くなると予想される。それだけではなく、-*lo*の解釈を一つに絞り込むことができないこともありうる。実際、拙稿(2012)では日本語の「一ニスル」が朝鮮語でどう翻訳されるかを調べ、「一ニスル」の持つ「変化」の意味が、「同一性として翻訳に反映され……さらに、同一性の上に様態・手段・道具または選択の意味が読み込まれるとき、'-*lo hata*'で翻訳される」(p.51)とし、*hata*[する]のような意味の抽象性が高い動詞が述語のときは、-*lo*に複数の意味が重複的に含まれることを示した。その上で、拙稿(2012)では「様態・手段・道具の意味を同一性から直ちに導くのは困難なように思える。同一性、

様態・手段・道具、選択の3つを統一的に説明するには、さらに検討が必要であろう」(p.51)とした。

以上の先行研究から、本稿の課題を次のように設定する。

- 1) -lo が付加された名詞を述語として書き換えることができないか確認する：筆者の素朴な直感として書き換えられる場合もあるように思える。
- 2) -lo を -ka で置き換えられるかどうか確認する：上で述べたように先行研究の間で見解の違いがある。
- 3) -lo が複数の意味用法を重複的に持っているかどうか確認する：toyta は形容詞を作ることができないという点で、hata と同程度とまでは言えないかもしれないが、一般的な意味しかもっていない。
- 4) -lo が複数の意味用法を重複的に持っているとしたら、それらをどのように関連づけられるか検討する。

これらの課題の解決には、まずは主語と -lo が付加された名詞の意味的な関係を見る必要があるであろう。

### 3. データ

上に上げた課題のうち、1)と 2)は先行研究であげられた例文をいろいろ書き換えて母語話者の内省による判断を示しつつ論を進める。母語話者は広島大学大学院生2名（どちらも20代の女性。以下「母語話者」とは彼女たちのことを指す）で、文法性の判断を「1：文法的、0：どちらとも言えない、-1：非文法的」のように点数で判断してもらい、それを合計した。よって、合計点は2, 1, 0, -1, -2のうちどれかの値になり、値が大きいほど文法性が高いとみなした。課題3)と4)は筆者が28編の主として短編から中編の小説にあたって得た13個の例文と、21seyki seycongkyeyhoyk malmwungchi[21世紀世宗計画コーパス]の簡易検索で得た-loの最初の例文13,500個<sup>4)</sup>から、さらに目視確認して得た21個の例文の計34個の例文を分析する。

### 4. 書き換えの可否

この節で課題1)と2)をまとめて扱う。以下の例文<sup>5)</sup>、1a, 1bは任洪彬(1974: 146)、2aは南基心(1993: 242)、3aは南基心(1993: 243)、이희자/이종희(1998: 76)で、いずれも文法的な文として提示されている。しかし、これらの文の文法性を母語話者に判断してもらったところ、( )で示すように、-lo toytaである1a, 2a, 3aに対する母語話者の許容度は極めて低い。一方、各aの-loを-kaで書き換えた1b, 2b, 3bは文法的である。

1a ai-ka elun-ulo toy-et-ta. (-2)

子供主 大人LO TOY過終

b ai-ka elun-i toy-et-ta. (2)

子供主 大人転 TOY過終

[子供が大人になった。]

2a mwul-i elum-ulo toy-et-ta. (-2)

水主 氷LO TOY過終

b mwul-i elum-i toy-et-ta. (2)

水主 氷転 TOY過終

[水が氷になった。]

3a olchayngi-ka kaylkwuli-lo toy-et-ta. (-2)

おたまじゃくし主 蛙LO TOY過終

b olchayngi-ka kaylkwuli-ka toy-et-ta. (2)

おたまじゃくし主 蛙転 TOY過終

[おたまじゃくしが蛙になった。]

1a に関して任洪彬(1974)は、「[1a]の変化が選択の余地がある場合、特にその変化の過程を問題にする場合を記述するのに使われる……試験管の中の変化を観察しながら、その予測できない結果を予測する場合、[1b]のような表現は用いることができないと考える」(p.149)と述べている。母語話者はそのような状況を想定できなかったので 1a を許容しなかった可能性がある。そこで、変化が徐々に進む — 前後の観察を比較することでそれが認識されるので、ある一時点での観察においては変化の方向について前提がないということにもなる — ことを表す副詞 cemcem[だんだん]を挿入し、toyta も過程の進行を表す補助動詞としての kata (本来は[行く]の意味。グロスでもそう表示) を付け加え、変化の過程に注目する文に書き換えて、これを 4 として提示する。4 に対する母語話者の許容度は 1a と比較して大きく上がる。

4 ai-ka cemcem olun-ulo toy-e kat-ta. (1)

子供主 だんだん 大人LO TOY副 行く・過終

[子供がだんだん大人になっていった。]

そこで、2a, 3a も 1a と同じように書き換え、それぞれ 5, 6 として提示する。やはり、2a, 3a と比較して 5, 6 の許容度は大きく上がる。

5 mwul-i cemcem elum-ulo toy-e kat-ta. (1)

水主 だんだん 氷LO TOY副 行く・過終

[水がだんだん氷になっていった。]

6 olchayngi-ka cemcem kaylkwuli-lo toy-e kat-ta. (2)

おたまじゃくし主 だんだん 蛙LO TOY副 行く・過終

[おたまじゃくしがだんだん蛙になっていった。]

-lo toyta は任洪彬(1974)の言うように、変化の過程に注目したものであろう。これで-lo toyta の-lo は-ka で置き換えられるということになり、課題 2)は解決できた。

以下 3a を 7a として提示する。また、7b は南基心(1993: 243)が非文法的な文として、8a も南基心(1993: 245)が非文法的な文として、8b は南基心(1993: 245)が文法的な文として提示したものである。南基心(1993)にとって 7a(=3a)は文法的な文であるし、上の 6 のような状況を想定すれば母語話者にも受け入れられる。一方、7b, 8a, 8b の文法性については母語話者の判断と一致している。したがって、これらの例文から・lo が付加された名詞を述語として・lo toyta を書き換えることができないように見える。

7a olchayngi-ka kaykwuli-lo toy-et-ta. (=3a)

おたまじゃくし主 蛙LO TOY過終

b \*olchayngi-ka kaykwuli-ta. (-2)

おたまじゃくし主 蛙終

[??おたまじゃくしが蛙だ。]

8a \*chelswu-ka pwuca-lo toy-et-ta. (-2)

[人名]主 金持ち・LO TOY過終

[チョルスが金持ちになった。]

b chelswu-ka pwuca-ita. (2)

[人名]主 金持ち・終

[チョルスが金持ちだ。]

しかし次の例文を見られたい。9a は実例で、9b はそれを筆者が書き換えたものである。9b は母語話者にとって文法的である。・lo が付加された名詞を述語として・lo toyta を書き換えることができないとは言えない。

9a wuncenkisa taykisir-un ontolpang-ulo toy-e iss-et-ta. (影)

運転手 待機室話 オンドル部屋LO TOY副 ある過終

[運転手の待機室はオンドル部屋になっていた。]

9b taykisir-i ontolpang-ita. (2)

待機室主 オンドル部屋終

[待機室がオンドル部屋だ。]

7 では olchayngi[おたまじゃくし]が成長して kaykwuli[かえる]になるので、主語名詞 olchayngi と・lo が付加された kaykwuli は、同じ階層にあって互いに対立している。一方、8 の主語名詞 chelswu (人名) と・lo が付加された pwuca[金持ち]、9 の主語名詞 taykisir[待機室]と・lo が付加された ontolpang[オンドル部屋]はそのような関係にない。したがって、・lo toyta では主語名詞と・lo が付加された名詞が同じ階層で対立関係にある(7)こともない(9)こともある。また、主語名詞と・lo が付加された名詞が同じ階層で対立関係にあれば、・lo が付加された名詞を述語として書き換えることができない(7)が、そうでなければ書き換えることができる(9)。これで課題 1)は解決である。

5. 主語名詞と-lo が付加された名詞

実例はすべて、先行研究で挙げられた 1a~3a タイプの文、すなわち主語名詞と-lo が付加された名詞が同じ階層で対立関係にある文ではなく、そのような関係が成立しない文であった。まず、10 では-lo が付加された名詞は pwulpep[不法]で、法律や規則としてそのようになっているということである。

10 hankwukin-i kwunphyo-lul kat-nun kes-un pwulpep-ulo toy-e it-ta. (アメリカ)

韓国人主 軍票対 持つ冠 こと話 不法LO TOY副 ある終

[韓国人が軍票を持つのは不法になっていた。]

また、次のように法的な根拠と効力があるという例もあった。

11 pepcek-ulo-nun kyopo-uy soyu-lo toy-e it-nun cak-un kongkan-iciman (-lo:2929)<sup>6)</sup>

法的具話 (社名)冠 所有LO TOY副 ある冠 小さい冠 空間逆

[法的にはキョボの所有になっている小さい空間だが]

次の例は pepcek-ulo(-nun)[法的に (は)]という言葉はないが、myenguy[名義]には法的な根拠と効力があるだろう。myenguy の例は 2 個あった。

12 seymyeng-uy casik-tul myenguy-ulo toy-n cipmwunse (人間市場)

3名冠 子供複 名義LO TOY冠 家の権利書

[3 人の子供の名義になった家の権利書]

次の catonichey[引き落とし]のような制度もまたここに分類できるだろう。

13 elma cen catongichey-lo toy-e it-nun cathayk cenhwa chengkwuse nayyek-ul

いくらか 前 引き落としLO TOY副 ある冠 自宅 電話 請求書 内訳対

salphyepo-ten cwung....(-lo:594)

調べる冠 うち

[この間引き落としになっている自宅の電話料金請求書の内訳を調べているうち]

以上のように法律や規則、法的効力を持つ事柄、あるいは規則の例として、-lo が付加された名詞は他に、戸籍上の性別 yeca[女性]や生年 1948nyensayng[1948 年生]、日程 5ilpwuthe[5 日から]、2wel 11il[2 月 11 日]、naytal[来月]や期間 6kaywel[6 カ月]、制度 pikongkay tunglok[非公開登録]、cengpochaykimca-ka semyengha-n ket[情報責任者が署名したもの]があった。この類に属す例は全部で 13 個であった。

次に多いのが形あるいは数量がそうになっているという例で、5 個あった。例えば、次の例では家の形がハングル字母の最初の文字 kiyek[ㄱ]の形をしている。

14 sikaci-ey it-nun twitkolmok-ey it-nun kiyekca-lo toy-n cokuma-n yangchelcip-ulo...

市街地處 ある冠 裏通り處 ある冠 ㄱ字LO TOY冠 小さい冠 トタン屋根の家方

(興南)

[市街地の裏通りにあるㄱの形になった小さなトタン屋根の家に...]

次の例では建物 cey2 yengpinkwan[第 2 迎賓館]の広さを言っている。

15 cey 2 yengpinkwan-un 2man 6chenyephyeng-uy the-ey tanchung 3payk 12phyeng-ulo  
第2 迎賓館話 2万 6千余坪冠 敷地處 平屋 312坪LO

tway it-ta. (-ulo: 5600)

TOY・副 ある終

[第2迎賓館は2万6000坪あまりの敷地に平屋建ての312坪になっている。]  
 同様の例として-lo が付加された名詞には moyang[形、格好]が2例、(sonhay[損害]の) 3cwung[3重]があった。

話し合いの結果を表す例も2例あった。16はそのうちの一つである。

16 ceng inswu-ka mence tuleka mwue-lako hancham kyosep-ul ha-ko nao-teni, ilhayng-i  
[人名]主 先に 入る・順 何引 しばらく 交渉対 する順 出る順 一行主

tulekato coh-tanun kes-ulo toy-et-ta. (興南)

入る・譲 よい印冠 こと-LO TOY・過・終

[チョン・インスが先に入ってしばらく何やら交渉して出て来たが、一行が入ってもよいということになった。]

また、材料を表す例も2例あった。17はそのうちの一つである。さらに、構成や形式を表す、建物 2chay[2棟]、音楽のリズム 2pakkyeythong[2拍系統]もここに分類できるだろう。

17 kenmwul-ey-n pyek-i motwu yuli-lo toy-e iss-e.... (-lo: 3014)

建物處話 壁主 全部 硝子-LO TOY・副 ある順

[建物の壁が全部硝子になっていて....]

他に習慣や一般的な通念として-lo が付加された名詞には sangsiki[常識]、ilkwa[日課]があった。次の例もここに分類できるだろう。

18 sangsikcek-ulo-nun changnye-uy kes-un telep-ko cengswukha-n yeca-uy kes-un

常識的具話 娼婦冠 物語 汚い順 貞淑だ冠 女冠 物語

kkaykkutha-n kes-ulo tway it-ciman....(その秋)

綺麗だ冠 こと-LO TOY・副 ある逆

[常識的には娼婦の物は不潔で貞淑な女の物は綺麗だということになっているが...]

以上27例が現時点で分類ができているが、分類できていないものも調べた結果、-lo が付加された名詞は、意味的に主語名詞と対立するものではなく、何らかの面でそれを特徴づける意味を持っていると言える。主語名詞が表す物はそれでありつづけるので、李南淳(1998)の言う「外延的限定」と繋がるのかもしれない。また、この特徴づけには人為性がその背後に感じられる。すなわち、決定、およびそれに不可避的に付随する選択の概念が背後にある。ただ、人為性は背後に後退し、そのような特徴が備わったことを表す。ここで言う「人為性」は意図性が必ずしもはっきりしないことがある。例えば、習慣は、意図的に作るのではなく、意図しないうちにできることも多い。一般的な通念はその形成

に当たって通常意図性はないであろう。したがって、この二つは普通に理解される「人為」の中には入らないかもしれない。しかし、広い意味では人為的だと言って差し支えないだろう。

ここで、*toyta* の形について言えば、その副詞形 $-e$ に存在動詞 *itta* が補助動詞化して結合し、結果状態の持続を表す例が 25 例あった。この 25 例には補助動詞 *itta* の $-nun$  または $-ten$  冠形詞形も含む。これとは別に、補助動詞のない、*toyta* 自体の $-n$  冠形詞形も 4 例あった。 $-n$  冠形詞形はアスペクト的には完了ないし結果相を表す。したがって、実例 34 個のほとんどが[なる]という出来事の結果ないし結果状態の持続を表していると言うことができる。

まとめて言えば、実例から見た $-lo\ toyta$  は、主語名詞の表すものに、 $-lo$  が付加された名詞の表す特徴が人為的に備わった、もしくは備わっていることを表す傾向が強いと推測できる。

## 6. $-lo$ の表す諸概念

実例から見た $-lo\ toyta$  の $-lo$  には決定、選択の概念が背後にあった。決定、選択によって、その物が特徴づけられるような変化が引き起こされたのである。したがって、 $-lo\ toyta$  の $-lo$  は決定、選択、変化の意味用法を重複的に持っていると言える。また、 $-lo$  の表す意味用法には材料も広く認められている。材料が感覚的に目立つものであれば、その物の特徴となる。例 17 では壁が一面硝子になっており、硝子は壁の材料であるとともに壁の特徴である。材料は、これも広く認められている道具・手段に含めることができる。例えば 이희자/이종희(1998)では、 $-lo$  の 3 番目の「意味・機能」に「材料、道具、手段」をあげ、各々をその下位分類としている。このように、 $-lo$  は道具・手段の意味用法も重複的に持つことがあり、決定、選択、道具・手段、変化の意味用法が「特徴づけ」を中心に関連づけられている。一方、変化は同一化（いわゆる「資格」）と結びつき、変化の方向は、これも $-lo$  の用法として広く認められている「移動の方向」と結びつく。このように、 $-lo\ toyta$  を分析することで、 $-lo$  に広く認められている意味用法を互いに関連づけることができる。

## 7. まとめ

$-lo\ toyta$  は $-lo$  を $-ka$  に書き換えられるが、 $-lo$  が付加された名詞を述語として書き換えることができる場合もできない場合もある。

$-lo\ toyta$  は実際には $-lo$  が付加された名詞の表す特徴が主語名詞の表すものに人為的に備わった、もしくは備わっていることを表す傾向が強いと推測できる。しかし、先行研究に挙がっていた $-lo\ toyta$ (例 1a, 2a, 3a)は文字通り自然の成り行きを表し、変化の過程に注目したものであった。両者を統一的に説明する必要があるが、今後の課題としたい。

$-lo\ toyta$  を分析することで、 $-lo$  に広く認められている、意味用法を互いに関連づけるこ



とができる。しかし、*-lo toyta* を見る限りにおいては、「道具・手段」は「特徴づけ」を媒介にしており、それだけ他の意味用法との関連性は薄い。

## 注

1) ローマ字転写は Yale University 方式に若干手を加えたものを使用する。標準文法では助詞が認定されているが、非独立語とされる。助詞を認定せず語尾の一種だとする見方もある。ここでは、標準文法に従って「助詞」としておくが、非独立要素なのでハイフンをつけて表す。また、*-lo* には音声環境による異形態 *-ulo* があり、母音と l で終わる名詞には *-lo* が、その他の子音で終わる名詞には *-ulo* が付加されるが、例文を除いて母音終わりの名詞に付加される *-lo* で代表させる。その他の助詞についても同様の示し方をする。例文では異形態は異形態としてローマ字転写をする。

2) ( ) 内は崔鉉培(1937)自身の用語で、他も同様である。

3) 李南淳(1998)は格助詞 *-ey* との対比においてのみ論じたものである。しかし、*-ey* と競合する環境で *-lo* が「外延的限定」機能を持つということが正しければ、他の環境においても *-lo* は「外延的限定」機能を持つであろう。

4) 実際は 21seyki seycongkyeyhoyk malmwungchi[21 世紀世宗計画コーパス]の簡易検索では *-lo* と *-ulo* のそれぞれを検索語にしなければならない。それぞれで検索した結果、それぞれ最初の 450 ページで 6,750 個ずつ例が挙がっていた。なお、この範囲ではジャーナリズムへの傾倒が著しいことを断っておきたい。

5) 例文のグロスでは *-lo* は *-LO*、*toyta* は *TOY* と表示する。日本語訳では *-lo* でも *-ka* でも「転成格助詞」は「に」、*toyta* は「なる」にしている。日本語では「に」「と」の使い分けが問題になるが、これには触れない。

6) 21seyki seycongkyeyhoyk malmwungchi[21 世紀世宗計画コーパス]の簡易検索で得た実例は、( ) 内に、検索語(注 4 参照)と例文番号を示す。

## 略号

引：引用、引冠：引用冠形、過：過去形、冠：冠形、冠形格、逆：逆接形、具：具格、主：主格、終：終止形、順：順接形、處：處格、讓：讓歩、対：対格、転：転成格、副：副詞形、複：複数、方：方向格、話：話題

## 用例出典(小説)

[アメリカ]아메리카(趙海一)・現代韓國文學全集 54

[影]그림자(柳在用)・第三世代韓國文學 14

[興南]興南撤收(金東里)・現代韓國文學全集 13

[その秋]그 가을의 사흘 동안(朴婉緒)・第三世代韓國文學 17

[人間市場] 人間市場 (金洪信) . 第三世代韓國文學 22

\* 『現代韓國文學全集』、『第三世代韓國文學』ともに三省出版社 (ソウル) から前者は 1982 年 (重版)、後者は 1983 年の発行。

#### 言及した文献

深見兼孝(2012)「日本語の『ーニスル』と朝鮮語の‘lo hata’について」『広島大学国際センター紀要』第2号, pp.51-60.

김승곤(1992) “국어 조사 「으로」 류의 구문적 직능고 - 특히 그 의미직능을 중심으로 -” 국어 토씨 연구 61-81. 서광 학술 자료사

南基心(1993)국어 조사의 용법 -‘-에’와 ‘로’를 중심으로-. 서광학술자료사.

李南淳(1998) 格과 格標識. 月印. ソウル.

이희자/이종희(1998) 사전식 텍스트분석적 국어 조사의 연구. 한국문화사

任洪彬(1974) “{로}와 選擇의 樣態化” 語學研究 10-2, 143-159.

崔鉉培(1937) 우리말본. 延禧專門學校出版部. (『歷代韓國文法体系』第1部第18冊. 塔出版社. ソウル.)